

小田草神社の梵鐘ぼんしょう

さて、新しい1年は除夜の鐘の音と共にスタートしますが、今回は町内にある岡山県指定文化財「小田草神社の梵鐘」の話をいたします。

神社になぜお寺の梵鐘があるのだろう？と疑問に思うかもしれませんが、明治元年（1868）の神仏分離令以前には、神仏習合の考えから神社とお寺が同じ敷地で祀られており、小田草神社の梵鐘もその名残といえます。この梵鐘は、延宝五年（1677）年に地中から掘り出されたと『作陽誌』の記録にあります。

この梵鐘には次のような銘文が刻まれています。



小田草神社の梵鐘



梵鐘銘

美作国野介庄小田草大明神
全天長地久御願圓滿庄内
安穩萬民与樂御志爲也
貞治七年三月廿四日

小田草城主齋藤二郎

貞治七年（1368）は、京都（北朝）と奈良の吉野（南朝）に2つの朝廷が分かれていた南北朝時代にあたり、「貞治」の年号は北朝が用いていた年号です。「野介庄」とは、古代から中世にかけての馬場・塚谷あたり一帯をさす地名で（正確な範囲は定かではない）、この梵鐘銘は野介庄内の平和が長く続き、人々が楽しく暮らせますようにとの祈りをこめて齋藤二郎という人物が小田草神社に奉納した梵鐘です。

小田草神社は、「小田草

宮由緒書上帳」によると暦

応五年（1342）に領主齋

藤次郎実寄（頼）によって再

建されたといひ、齋藤氏は

この頃にはこの地域を治め

る領主であり大宮司だった

ようです。戦国時代には神

社の背後の山に山城が築か

れ（小田草城）、齋藤氏の

居城であつたとされています。当時の史

料でも齋藤実秀・実次・親実という人

物らが活躍していたことが記録されてい

ます。梵鐘はこの頃に兵火を避けるた

めに埋められたという説もあります。

これらからも小田草神社・小田草城が

齋藤氏と深い関わりのある城であつたこ

とがわかります。

梵鐘銘にも「小田草城主」の文字が

刻まれていますので、この頃にはすでに

小田草城が存在し、齋

藤二郎が城主であつたこ

とが想像できそうですが、

この梵鐘銘をよく見ると、

「小田草城主」の5文字

だけ様子が違うことがわ

かります。写真で比較し

てみるとわかりますが、

他の文字は草書体風に崩

した文字で刻まれ、文字



「小田草」の文字の違いがわかります

の大きさ、打ちこみや跳ねの部分もあいまいで一定していませんが、「小田草城主」の文字は楷書体で、打ちこみや跳ねもしつかりしています。また、緑青（銅の錆）の入り方も他の文字よりも薄くなっています。

このことから、小田草城主の文字は後世に刻まれた可能性が高いものと思われまます。おそらく地中から掘り出された後に、かつてこの地域を治めた領主を顕彰するために子孫の方があるいは氏子の手によって付け加えられたのでしよう。

梵鐘二つの中にも人々の色々な思いやドラマが感じられ、想像をかき立てられます。

お問い合わせ先

生涯学習課 日下
電話（0868）54-7733

参考：『鏡野町史』史料編・通史編、
『鏡野町の文化財』、『小田の村誌』